

自然誌 だより

Natural history



三重自然誌の会情報誌 141号

2024年 9月

川は誰のもの

紀伊山中の半世紀以上前、夏の子どもは川で遊ぶしかなかった。昼ごはんを食べたら、ヘシ(モリ)とワッパ(水中眼鏡)をもって川に行き、集まった何人かと川を遡上しながら、ハイコンベ(カワムツ)やヒメマス(オイカワ)、ウグイ、時にはナマズなどをヘシで突いて、ヤナギの枝に鰓から通して持ち歩いた。ヤナギの枝は皮をむくとすべすべで通しやすかった。持ち帰って食べた記憶はないので、その場で捨ててきたのであろう。時には、優しい気持ちになってか、ヨモギの汁を搾って魚の傷につけてから水中で尾をつまんで前後させ、「いきいきとんぼ いきたらはなす」と意味不明の呪文を唱えたりもした。もちろん元気になったことはない。毎年、同じ行為を繰り返したが、毎年同じように捕れた。ところが昨今は、漁業権設定とかで、川でヘシを使っていたら漁協組合員に怒られる。せめて子供たちには自由にさせてやれよと思うのだが、設定したらアユやウナギとかの放流をしなければならないらしく、夏の川はアユまみれである。国内移入種の導入でもあり、生態系のバランスを崩していることは間違いない。本来は公共であるはずの川を、まるで私物の釣り堀のようにあつかう内水面漁業は、外来生物法や河川法等との整合性がはかれているのだろうか。



写真 大量に群れるアユ、他の魚種が混じって放流されることもある。左下：ヘシ等禁止看板、右下：川で遊ぶ家族(研屋典子撮影)。いずれも2024年8月、熊野市紀和町大栗須 板屋川。川は子供たちにとって他に代えがたい原体験・学びの場となる。昨今は魚を突くことには愛護の観点から異論もあるが、好きな子にはさせてあげたい。

(清水 善吉：松阪市日丘町 13869-17)

池ノ谷のモリアオガエルー2024

宮 島 美 栄

三重県の文化財保護指導委員として松阪・大台地区をパトロールし始めて今年で4年になった。当初より、昨今の気候変動の影響がどのように出現するのか、紀伊半島最大のモリアオガエルの繁殖池・池ノ谷（大台町）で、カエル達が本格始動する初夏以前の早春から観察を続けてきた。

今年（2024年）の春は珍しく気温は平年並み、珍しく、というのは近年続いている暖冬傾向からすると、ということである。そして降水量が非常に多かった。昨年は紀伊長島のデータのみ対象にしたが、今年は大台町を囲む4地点を調べた。特に3月の降水量が4地点とも軒並み平年値の倍を超えていた（表1）。結果として、例年ならば冬期は干上がっていて梅雨待ちの池は4月上旬で7割ほどの水を湛えていた（写真1）。

表1 2024年の大台町周辺4地点の気象データ

気温					降水量									
地区		紀伊長島		粥見	地区		宮川		藤坂峠		紀伊長島		粥見	
月	月平均	平年値	月平均	平年値	月	合計	平年値	合計	平年値	合計	平年値	合計	平年値	
1月	7.4	6.2	5.2	4.2	1月	190.5	79.3	133.5	68.7	152.5	70.9	67.5	56.1	
2月	9.4	6.9	7.0	4.7	2月	216.0	89.7	209.0	80.2	195.0	80.0	135.0	63.0	
3月	9.9	9.8	7.6	8.0	3月	313.5	168.1	275.0	159.1	306.5	164.3	236.0	115.5	
4月	16.6	14.3	15.5	13.0	4月	240.0	214.6	263.0	212.1	234.5	207.3	154.5	143.3	
5月	18.6	18.3	17.8	17.8	5月	210.0	285.6	246.0	270.8	217.5	253.4	160.5	188.4	

昨春は、春の気温が異常に高かったのに、冬の極端な少雨に加え春も雨が少なめで、池の水はなかった。卵塊が確認できたのも池の水が溜まった5月の半ばになってからだった。ところが、今春は逆に、多量の雨で満水状態なのに朝晩は寒いほどに涼しい。その影響か、5月下旬になっても卵塊は一つも確認できなかったのが、ようやく5月最終日の31日にいきなり240個超を確認。さらに今年の異常気象は続く。梅雨入りが2週間以上も遅れ、6月になっても乾いた晴天が続き涼しかった。例年ならば6月の第2週でピークを迎える卵塊数が、例年満々と水を湛えるその頃に池の水が半減してしまい(写真2)、毎年多数の卵塊が確認される池から流れる沢も干上がり、今年は少なかった昨年よりさらに少ない314個であった（6月17日）。

もしかしたら、5月31日～6月第2週の間が産卵ピークだったのだろうか。6月にもなれば日中の気温が25℃は越えてくるので、この間にモリアオガエルの産卵が終えた可能性がある。あるいは、今年の晩春から初夏にかけての涼しさに加え、5月中旬から6月中旬（産卵時期）の池の水が多くなる1ヶ月に雨がなく水がないというカエル達にとっての異常事態で、産卵も遅れているのだろうか。夏至の日にとやっと梅雨入りが発表された。もしかしたら、これから水量が回復して産卵があるかもとの思いで



写真1 満々と水を湛える池ノ谷(4月10日)



写真2 池の水が半減した池ノ谷(6月17日)



写真3 卵塊のようす(6月26日)

表2 気象データ（紀伊長島）と産卵数の推移

		1月	2月	3月	4月	5月	6月
30年間	気温	6.2	6.9	9.8	14.3	18.3	21.6
平年値	降水量	70.9	80.0	164.3	207.3	253.4	312.9
	気温	6.4	8.7	12.5	14.6	18.3	21.8
2021	降水量	76.5	136.0	406.5	310.0	280.0	231.0
	卵数	初確認日5/18；30個，ピーク日6/5，最終確認数656個					
	気温	5.9	5.8	11.3	16.0	18.5	22.3
2022	降水量	20.5	25.5	154.0	279.0	214.5	310.0
	卵数	初確認日5/16；30個，ピーク日6/7，最終確認数613個					
	気温	6.3	7.9	12.3	15.7	18.8	22.4
2023	降水量	25.5	26.0	196.0	187.5	228.0	570.0
	卵数	初確認日5/22；15個，ピーク日6/14，最終確認数428個					
	気温	7.4	9.4	9.9	16.6	18.6	22.3
2024	降水量	152.5	195.0	306.5	234.5	217.5	307.0
	卵数	初確認日5/31；240個，ピーク日6/26，最終確認数406個					

取れないほどバラバラだ。これらは月平均値であり，平均してしまえば，さらに30年間の平年値とも似たような値になる。しかしながら実感として，確かに私が子供の頃のような気象ではない。平均値になってしまうとわからないが，とにかく極端だ。雨も気温も，降れば土砂降りゲリラ豪雨，照れば気温は季節関係なくうなぎ上り。逆に曇ると激下がり，その差は20度以上になることも。たぶんだが，そういうことが卵数の減少に影響しているのではないかと考える。

また，来年も継続して観察を続けていく。（みやしま みえ：大台町上三瀬52-1）

特定外来種アカホシゴマダラ三重県に侵入

中国大陸に産するアカホシゴマダラ *Hestina assimilis assimilis* (名義タイプ亜種) は，1995年に埼玉県下で発見され，2011年には関東地方全県，山梨，静岡県に定着した。この個体群は原産地の中国，朝鮮半島からの飛来ではあり得なく，人為的意図的な搬入，放蝶と考えられている。愛知県では間野・岩本（2011）が，名古屋市内からの発見例を報じているが，筆者は川越町で本種を採集したので（写真），三重県への侵入を報告する。

1♀採集 三重郡川越町亀崎新田川越火力敷地内 2024年7月19日。中西元男・採集標本所蔵

小さな破損はあるがほぼ新鮮なものである。地表10cmほどの位置に伸びたエノキの幼樹に降下しているものを発見，採集した。この個体は産卵行動中と思われる。飛来していたエノキから産下卵は確認されなかったが，採集以前に付近で産卵している可能性が高い。引き続き幼虫の発生などに注意を払う必要があると思われる。なお，本種は特定外来生物に指定され生体での移動が禁じられているため，幼虫を発見しても持ち帰り飼育することはできないので，注意を喚起しておく。

文献

間野隆裕・岩本やよい2011. 遂に名古屋市内で確認されたアカホシゴマダラ。佳香蝶，63（248），89。
高桑正敏2012. 日本の昆虫における外来問題（1）中国から持ち込まれたアカホシゴマダラをめぐって。月刊むし（497），36-40。

6月26日，増えててくれ！と折りながら行ってみた。結果は，沢の流れが回復し，沢沿いの木々に100個近い卵が新たに確認でき（写真3），あわせて406個。よかった。でも，少なかった去年よりさらに減ってしまった。

表2に池ノ谷の最寄りの紀伊長島の気象データと卵の数の推移（2021-2024）をまとめた。改めてこの4年間のデータを観てみると，気温は，変動があるものの確かに高めに推移している。降水量は傾向も読み



写真 アカホシゴマダラ。2024年7月19日，川越町亀崎新田

（中西元男：松阪市新町959）

東紀州に出現したジャンボ植物，ヨシススキ（その3）

山 本 和 彦

今回は尾鷲地域におけるヨシススキの分布状況を報告します。前回（本誌139号）と同様，Googleマップのストリートビューを利用し，過去のようにも把握してみました。現地調査は2023年から2024年にかけて実施しました。尾鷲地域を走る熊野尾鷲道路には，インターチェンジ（以下IC）が北から順に，尾鷲北IC，尾鷲南IC，三木里IC，賀田ICの4つあり，範囲が広いので尾鷲地区と三木里・賀田地区の2つに分け，今回は尾鷲地区におけるヨシススキの分布状況を報告します。

尾鷲地区

尾鷲北ICから尾鷲南IC間の自動車道沿いと市街地内を主に調べました。自動車道沿いは車の助手席から，市街地は歩いて調査し，9ヶ所の生育地を確認しました（図1）。ただし隅から隅まで調べたわけではないので調べ残しはいくつかあるかと思います。以下に9地点の生育状況について述べることにします。①～⑨の位置は図1を参照してください。



図1 尾鷲地区で確認されたヨシススキ生育地点。①，②熊野尾鷲道路沿い，③国道42号線沿いの埋め立て造成地，④尾鷲市野地町，⑤北川の川原，⑥尾鷲神社前付近の川の端，⑦国道42号沿いの広い更地，⑧矢ノ川下流の川原，⑨東邦石油タンク群跡地。

- ・①，② 熊野尾鷲道路沿い。①は尾鷲北IC周辺で，2023年調査時にはその法面や道路沿いに多数認められました。2014年のストリートビューではヨモギやススキが主で，ヨシススキはわずかしき写っていません。法面に目立ちだしたのは2018年頃からで，2021年には顕著になっています。②はトンネルとトンネルの間の自動車道沿いの平坦な裸地で，個体数は5株未満でした。ここは緑化工事ではなく，種子が飛んできて定着したものと思われます。
- ・③ 国道42号線沿いの埋め立て造成地。2024年現在，ここには大中小合わせて50株前後のヨシススキが生育しています。2014年のストリートビューの画像には写っていませんが，2018年には1個体写っていますので，この頃から侵入しだしたと思われます。
- ・④ 尾鷲市野地町。尾鷲駅近くの市街地の道端に1株生えていました。尾鷲北ICから直線距離で600m



図2 矢ノ川下流の川原に発達するヨシススキの小群落(白線枠内)(2024年8月23日)



図3 尾鷲三田火力発電所および東邦石油タンク群跡地(黄色線内)(2024年2月6日)

ほど離れた所です。2024年8月には刈られていましたが、株は残っているようでした。侵入時期は不明です。

- ・⑤ 北川の川原。尾鷲北ICを出て国道42を通過し県道778を少し行くと、北川を渡る弥栄橋が見えてきます。この橋の上下流の川原にヨシススキが見られました。ICからは直線距離で700mほど離れています。2023年10月の調査では下流の川原に大きな株が20個体ほど認められましたが、その後刈り払われたのか2024年8月時には小さな株が5個体ほど認められました。橋より上流には小株が20個体ほど散見されましたが、2024年も状況は変わっていません。2014、2018年のストリートビューでは上流、下流ともそれらしきものは見られず、2021年の画像では下流にのみ穂をつけた大きな株が10個体ほど写っていました。この川原には2018年以降に侵入したものと推測されます。2021年と2023年の分布状況を比較すると倍ほどに個体数が増えています。ヨシススキは一端侵入すると、かなりの速さで分布を拡大する場合もあるようです。
- ・⑥ 尾鷲神社前付近の川の端。⑤より300mほど下流のところで、2023年の10月時には川の端に10個体ほど大きな株が生育していました。2021年のストリートビューでは5未満でしたのでここも徐々に増えているようです。
- ・⑦ 国道42号沿いの広い更地。ここは家電量販店が営業していましたが、2020年に撤退し、広い更地となりました。2021年12月のストリートビューでは、更地の端にススキが見えますが、ヨシススキは見られず、更地内は裸地状となっています。2023年10月の調査時では、大中小合わせて50株前後のヨシススキが更地内に散見されました。尾鷲北ICから直線距離で約2km離れていますが、2020年以降に種子が風散布により更地に到達し、定着したものと思われます。今後放置すれば、大きな群落が出現しそうです。
- ・⑧ 矢ノ川下流の川原。矢ノ川に架かるJR紀勢本線の鉄橋より少し上流部の川原に発達する小群落です。2024年8月の調査では大中小合わせて50株前後確認しました(図2)。2014年のストリートビューでは確認できませんでしたが、2021年時の画像では川岸に数個体散見されました。ヨシススキは紀北町の赤羽川や銚子川でも見たように、増水等で攪乱され時々裸地となるような立地が生育適地のように見受けられます。ここは市街地の南端に近いところで、ヨシススキの発生源と考えられる尾鷲北ICから直線距離で3kmほど離れています。この程度の距離なら種子は風に乗って容易に運ばれるようです。
- ・⑨ 東邦石油タンク群跡地。2018年に尾鷲三田火力発電所が廃止となり、それに伴い東邦石油タンク群も撤去されることになりました。2020年にはタンク群もほとんど撤去され、広い更地が出現しています。2024年8月に調査したところ更地の端に数株ですが確認することができました。2021年のストリートビューでは、端の部分は土砂が盛られており、何も生えていない状況でしたのでヨシススキは2021年以降に侵入したと思われます。2024年現在、火力発電所とその関連施設の跡地には63万4千㎡の広大な空き地が広がっています(図3)。これを放置すればヨシススキの大群落が出現するのではと危惧されます。

(やまもと かずひこ：尾鷲市小川西町8-40)

モモンガと巣箱とカメラ

清水善吉

津市美杉町にある三重大学演習林が県民に開かれていた35年ほど前、官舎横のケヤキに架けた巣箱にモモンガ棲みついたというはなしを職員さんからお聞きし、撮影に通ったことがあります。仕事帰りの夜、巣箱や飛び出し地点に焦点を合わせてカメラをセットして活動開始をひたすら待ち、出たらスイッチを押すという一瞬の作業でしたが、実際にモモンガを観察できるワクワク感がありました。この時の写真は、「アニマ」という雑誌の写真コンテストに応募したところ落選でしたが、後日、「巣箱一森のすまい」特集の際に原稿依頼がありました。2頁でわずか2千円の原稿料で、この雑誌も長くないなと思ったのが昨日のようです（予想はあたってしばらくして廃刊になりました）。

最近、トレイルカメラ（センサーカメラ）が普及し、動物が通れば自動撮影できるので、待つ必要はなくなりました。このカメラは比較的安価（5～6000円）ですので、県内のヤマネの生息状況を調べるために使っています。ヤマネも巣箱を利用しますが、休息場所を頻繁に変えるため、巣箱のチェックを行っても出会う機会はめったにありません。樹皮やコケ等の巣材を残すこともあります。これらも決め手に欠けます。そこで、巣箱とカメラをセットにして設置しておけば（写真1）、訪れた場合には必ず確認することができます。動物に出会うというワクワク感はありませんが、複数個所で同時に調査ができますので、効率的です。巣箱には、ヤマネ以外にもいろいろな動物が訪れ、彼らの訪問時によすは、森の中の「異物」をチェックしているようにみえます。モモンガも同様で、ヤマネ用巣箱は彼らには窮屈ですが、確認にやってきます。

そこで、県内で行われている開発事業、とくに風力発電事業では国指定天然記念物ヤマネの調査が巣箱とカメラのセットによる方法で実施されていますので、ともなうモモンガの記録がないかを環境アセスメントの報告書で調べてみました。すると、青山高原に計画されている風力発電予定地で記録があり、掲載の地図から読み取ると、津市美里町北長野および平木、同市芸濃町河内地内の4地点でした（（仮称）平木阿波ウインドファーム事業及び（仮称）平木阿波第二ウインドファーム事業にかかる環境影響評価準備書、2021年）。青山高原からモモンガの記録は初めてですので、念のため写真による確認を事業者様にお願いしたところ、提供してくれました（写真2）。感謝申し上げるとともに、モモンガの保全にもご尽力下さるようお願いします。

モモンガは直接観察の困難な動物ですが、トレイルカメラを用いることで生息確認できることがわかりました。野生動物には森のなかに突如出現した異物をチェックするという習性があるようなので、巣箱よりもさらに彼らの興味のひくモノはないかと思い巡らせています。



写真1 巣箱（手前）とトレイルカメラ（中央奥）のセット



写真2 2020年6月1日19時58分、津市芸濃町河内

（しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17）

津市河芸町の外来甲虫とミズアブ（ハエ目）

篠 木 善 重

津市河芸町の水田地帯に国道23号線と並行して、住民たちが新川と呼んでいる水路が走る。東側の土手にはパイオニアツリーの代表であるアカメガシワなどの雑木が茂り、クズが巻きついている（写真1）。このクズの蔓に数年前から大きな虫こぶができていたのに気づいていた。当地でフェモラータオオモモブトハムシの成虫を見つけたのは今年6月30日で、農道の草刈りをしていた時である。クズの葉上はもちろん、稲の葉上にもいる（写真2）。草刈り機のエンジン音にもピクリともしない。7月12日以降は見かけなくなった。このハムシは同町上野の海岸堤防近くでも見つかり、知人から標本の提供を受けている。

草刈りを兼ねて、ハムシの観察を続けていたところ、7月8日にクズの葉上でミズアブ♀（写真3）を見つけた。三重県レッドデータブック2015で絶滅危惧Ⅱ類に選定されている種で、私は今まで見たことがなかった。頭部や胸部背面に白い泥が付着しており、泥中から羽化したばかりと思われる。同月10日には土手に生えたアキノノゲシ葉上に♂（写真4）を見つけた。この♂は捕獲できなかったが写真撮影はできた。もう1個体を見つけたが、捕まえようとしたら、あっという間にどこかへ飛び立っていった。その後は会えていない。幼虫が生息していたのはおそらくこの水路だと思われる。ひとつの生息地での発生個体数は極めて少ないことが想定された。

外来甲虫と絶滅危惧種が同じ場所で同時期に見られるとは、来年も楽しみである。

ハムシの標本を提供していただいた締次琢治氏に感謝する。

記録

1. コウチュウ目ハムシ科 フェモラータオオモモブトハムシ *Sagra femorata* : 津市河芸町中別保新川, 1♂2♀, 1－Ⅶ. 2024, 篠木採集; 河芸町上野海岸堤防近く, 1♂, 20－Ⅶ. 2024, 締次琢治採集. .
2. ハエ目ミズアブ科 ミズアブ *Stratiomys japonica* : 津市河芸町中別保新川, 1♀, 8－Ⅶ. 2024, 篠木採集, 1♂, 10－Ⅶ. 2024, 篠木撮影.



写真1 クズが繁茂する新川沿い（2024.6.30）



写真2 稲葉上のフェモラータオオモモブトハムシ



写真3 ミズアブ♀（2024.7.8）



写真4 ミズアブ♂（2024.7.10）

（しのぎ よししげ：津市河芸町中別保2230-1）

ツキノワグマの痕跡

吉澤 映之

初めまして。昨年自然誌の会に入会しました。よろしくお願いします。

私が確認している紀伊半島のツキノワグマの痕跡は次の通りで、爪痕（1樹種に3本以上の痕跡を確認した場合）は、落葉樹の堅果類でブナ、ミズナラ、シバグリ、コナラ、トチノキ、漿果類はタカノツメ、カナクギノキ、タムシバ、アオハダ、ホオノキ、クマノミズキ、ヤマグワ、カマツカ、ミズキ、ナナカマド、ヤマザクラ、カラスザンショウ。照葉樹の堅果類はツブラジイ、スダジイ、アラカシ、ウラジロガシ、ツクバネガシ、アカガシ、（ツブラジイとスダジイの中間種ニタリジイやツクバネガシとアカガシの中間種のオオツクバネガシなども存在しているようですが、それらはツブラジイとアカガシとしている可能性があります）。漿果類はヤマモモ、カゴノキ、コバンモチ、カクレミノ（写真1）、バリバリノキ、ソヨゴ、ユズリハ、ヒメユズリハ、サカキ、リンボク、カンザブロウノキ、シロバイ、クロバイ、タブノキ。

クマ棚・枝折では、アラカシ（写真2）、ウラジロガシ、ツブラジイ、スダジイ、タブノキ、バリバリノキ、ヤマモモ、カゴノキ、タカノツメ、カナクギノキ、アオハダ、ブナ、ミズナラ、カマツカ、シバグリ、タマミズキ、コナラ。

クマ剥ぎはスギ（写真3）、ヒノキ、モミ、ツガ、サワグルミ、ブナ、ツブラジイ、タブノキ、他にはニホンミツバチ、マルハナバチ、クロスズメバチ（写真4）、キロスズメバチ、趣味の養蜂、アカマツなどの枯れ木や倒木に対する食痕です。



写真1 カクレミノの爪痕



写真2 アラカシのクマ棚



写真3 スギのクマ剥ぎ



写真4 クロスズメバチ巣の食痕

（よしざわ ひでゆき：尾鷲市倉ノ谷町24-4）

編集後記

原稿の集まりが順調で、編集作業がスムーズに進みました。これも酷暑の影響で、室内での執筆活動が促進されたのでしょうか。次号は12月発行予定ですので、奮ってご投稿下さい（善）。

自然誌だより141号 Mie Natural History Research Group News, No.141

発行日 2024年9月13日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail:shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp